礼拝説教（2019年4月7日）

説教者：中村信哉

乏しい中から持っているすべてを

マルコの福音書12章41-44節

はじめに

私たちの教会は、今年から月ごとのテーマを決めています。2月は「礼拝」、3月は「奉仕」でした。そして4月は「献金」となります。

私たちは、洗礼を受ける時またはこの教会に転入会して教会員になる時には、神様と教会の前でいくつかの誓約をします。その一つにこのような誓約があります。「あなたは、神の栄光を現すために、最善を尽くして教会の礼拝を守り、奉仕し、教会を維持することを約束しますか」。これは教会員として、最善を尽くして、礼拝を守り、奉仕をし、献金をすることを約束するということです。その意味で、すべての教会員は、①礼拝を守ること、②奉仕をすること、③献金を捧げること、に最善を尽くさなければなりません。

「礼拝」「奉仕」「献金」の三つは、教会員にとって大切な務めですから、2月～4月にかけてテーマとして取り上げたのです。そこで今日の説教では、「献金」についてお話したいと思います。

1. すべては主のもの、すべては主の恵みによって与えらえたもの

まず初めに、献金について考える上で、前提となることをお話します。

現代の私たちは、財産を自分で所有する社会に生きていて、「自分のもの」「他人のもの」という区別が明確になっています。

しかしイエス様を信じてクリスチャンとなり、主なる神様こそ世界を造られた方であることを知った私たちは、「自分のもの」も「他人のもの」も、本来は「神様のもの」であることを知るようになりました。

主なる神様は、この世界と私たち人間を造り、私たち人間にこの世界を管理する使命を与えられました。私たち人間は、神様に代わってこの世界を管理するのです。神様は、御自身のかたちに私たち人間を造り、この世界の管理を私たちの手に委ねてくださったのです。そしてこの世界を管理し、発展させるために、私たちは仕事をし、家庭を形成するのです。

神様は、私たちがこの世界を管理し、発展させるために必要なものを与えてくださっています。学力や技術を磨くために学校に行かせ、仕事を与え、衣食住などの財産を与え、ふさわしい助け手としての妻や夫も、将来を担う子どもたちも与え、さらに健康も与えてくださっています。それらはすべて、神様が造られた世界を私たちが管理し発展させるために、私たちにとって必要なものだからです。

私たち人間の本来的な使命は、神様が造られた世界を管理し、それを発展させることです。

そのために私たちは、学校に行き、仕事をし、家庭を形成します。そのようにして神様の栄光を現すことが、私たち人間の本来的な使命です。神様は私たちに、この使命を果たすために必要な仕事や財産や家庭や健康などをすべて恵みによって与えてくださっているのです。

しかし私たち人間は、アダムとエバが神様の命令に背いた時から、神様との交わりを失いました。そして罪の性質を持ち、神様からの使命に生きるよりも自己実現のために生きるようになりました。神様のために仕事をし、家庭を形成するよりも、自分のために仕事をし、自分のために家庭を形成するようになりました。そのため、仕事にも家庭にも罪の性質が入り込むようになりました。そして、私たちに与えられた財産は、自分の力で手に入れたかのように思うようになりました。そして神様よりも財産を愛し、財産を神のように崇めるようになりました。財産こそ、私たちの命を支え、私たちを幸せにするものと考えるようになりました。これが神様との交わりを失った私たち人間の姿であり、現代の多くの人の姿です。

しかし主なる神様は、私たちを愛してくださり、イエス様の十字架によって私たちを罪から贖い、私たちにイエス様を信じる信仰と悔い改めを与え、神様との交わりを回復させてくださいました。そして「神様のもの」としてくださいました。使徒パウロは言いました。**「あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい」**（**Ⅰコリント 6:19-20**）。私たちは以前、神様との交わりを失い、罪の奴隷でした。しかし神様は私たちを愛して、イエス様の命という尊い代価を払って買い取り、「神様のもの」「神様のしもべ」「神様の子ども」としてくださったのです。そしてもう一度、私たち人間の本来的な使命に生きるようにされたのです。神様が造られた世界を管理し、発展させ、神様のために仕事をし、神様のために家庭を形成し、そのようにして神様の栄光を現すようにされたのです。そして与えられた財産を崇めるのではなく、神様を礼拝し、神様からの使命を果たすために与えられたものとして財産を賢く管理するようにされたのです。

イエス様を信じて神様との交わりを回復した私たちは、仕事も家庭も健康もすべて神様の恵みによって与えられたものであることを覚えるべきです。そして「自分のもの」として与えられている財産も、仕事や家庭や健康があるからこそ与えられたもので、本来は「神様のもの」であることを覚えるべきです。そして私たち自身も、イエス様の命という尊い代価によって「神様のもの」とされたものです。その意味で、私たちの財産も私たち自身も、すべては「神様のもの」なのです。このすべては「神様のもの」、すべては「神様の恵みによって与えられたもの」という信仰こそが、「献金」を考える上で前提となるのです。

2. 乏しい中から、持っているすべてを

先ほど読んだ聖書箇所には、イエス様が私たちの捧げる献金をどのように見ておられるかということが書かれています。

イエス様はある時、人々が献金を捧げる姿を見ておられました。多くの金持ちがたくさんの献金をしている中、イエス様はひとりの貧しいやもめに目を留められました。彼女は夫を失い、経済的基盤を失い、貧しい生活をしていました。彼女が捧げた献金は、レプタ銅貨二枚でした。レプタ銅貨は、当時の貨幣の最小単位でした。レプタ銅貨二枚は、今で言うと130円ぐらいです。多くの金持ちが何万円も献金をしている中で、彼女はわずか130円を捧げたのです。

しかしイエス様は言われました。**「この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れている人々の中で、だれよりも多くを投げ入れました。皆はあり余る中から投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っているすべてを、生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから」**。イエス様は、献金の金額というよりも、どのような中から献金が捧げられたかを見ておられるのです。あり余る中からなのか、それとも乏しい中からなのかを見ておられるのです。それは、私たちの犠牲を見ておられる、私たちの信仰を見ておられる、私たちの献身を見ておられると言えます。私たち人間には、目に見える金額しか見えません。しかしイエス様は、どういう中から捧げられたのかを見ておられるのです。

貧しいやもめは、目に見える金額はわずかでも、財産のすべてを捧げました。財産がなければ、明日からの生活はどうなるのでしょうか。彼女は、明日からの生活も神様に信頼して捧げたのです。信仰を込めて献金を捧げたのです。自分自身を神様に捧げて、明日からの生活もすべて神様に委ねて献金を捧げたのです。

多くの金持ちは確かに大金を献金しました。しかしそれは、あり余る中からの献金で、生活に支障のない程度でした。生活が痛くも痒くもない献金でした。しかし彼女の献金は、自分の生活すべてを捧げた献金でした。神様に自分の生活をすべて委ねる信仰が伴った献金でした。多くの金持ちは、自分の生活は自分で保証し、余ったお金で献金を捧げました。しかし彼女は、自分の生活を神様に委ね、信仰をもって献金を捧げました。

イエス様が彼女の献金に目を留められたのは、彼女の姿には献金の本質があるからではないでしょうか。献金は、信仰を込めて捧げるものです。生活が痛くも痒くもない献金は、献金の本質を見落としています。献金は、自分の生活を捧げるものです。生活の痛みが伴ってこそ、献金と言えるのです。献金は、神様に生活を委ねる信仰の表れ、神様に自分自身の生活を捧げる献身の表れなのです。

また献金は、神様への感謝の表れでもあります。仕事、家庭、財産、健康が与えられていることの感謝、そしてイエス様を信じる信仰が与えられ、神様との交わりを回復し、救いを与えられたことの感謝の表れでもあります。

3. 新約時代に生きる私たちの献金

では私たちは、貧しいやもめのように、財産のすべてを献金として捧げなければならない

のでしょうか。

旧約時代は、捧げ物の基準として「十分の一」が定められていました。旧約の民は、神様に与えられたものの中から、「十分の一」を神様に捧げたのです。では新約時代に生きる私たちは、どのくらい捧げればよいのでしょうか。ある人は、「十分の一」は旧約時代の基準だから新約時代の私たちは、そんなに捧げなくてもよい、むしろ自由に喜びをもって捧げられる範囲で良いと考えます。一方ある人は、旧約時代の基準は新約時代の私たちにも適用されるべきだ、だから新約時代の私たちも「十分の一」を捧げるべきだと考えます。

私たちが属している日本長老教会の「礼拝指針」には、「十分の一」の捧げ物についてこのように書いてあります。**「ささげ物の基準として、モーセの律法の下では『十分の一』が規定されていたが、恵みがより豊かに注がれている新しい契約のもとでは、より豊かな感謝とともに、古い契約の下での『十分の一』に勝るものをささげるように心がける」**とあります。新約の時代は、イエス様の贖いが現わされ、神様の愛と恵みが旧約の時代よりも、私たちにより豊かに示されました。つまり新約の時代は、神様の愛と恵みがより豊かに示されたので、感謝と喜びもより豊かに表す必要があるのです。その意味では、旧約の時代に「十分の一」が捧げられたなら、神様の愛と恵みがより豊かに示された新約の時代が「十分の一」以下で良いはずはないのです。旧約の時代が「十分の一」であったなら、神様の愛と恵みがより豊かに示された新約の時代は「十分の一」以上であるべきなのです。

新約の時代に生きる私たちは、「十分の一」を制度化することはできないかもしれません。しかし旧約の時代ですら「十分の一」でしたので、神様の愛と恵みがより豊かに示された新約の時代に生きる私たちは、より豊かな感謝と喜びをもって献金を捧げるべきではないでしょうか。

おわりに

私たちに与えられた財産は、神様の恵みによって与えられたものです。神様が造られた世界を管理し、発展させるという私たちの使命を果たすために、神様が与えてくださったものです。本来は「神様のもの」です。

そして私たち自身は、罪の奴隷の状態から、イエス様の命という尊い代価を払って神様に買い取られ、「神様のもの」とされた者です。私たちの財産も、私たち自身も「神様のもの」です。

私たちは、その神様への感謝と献身を具体的に表すために、献金を捧げるのです。

使徒パウロは言いました。**「わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに借り入れます。一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。神はあなたがたに、あらゆる恵みをあふれるばかりに与えることがおできになります。あなたがたが、いつもすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれるようになるためです」**（IIコリント 9:6-8）。